一八八五年三月一日（日）

ドーラ・ヤートラ祭の日、南神寺(ドッキネーショル)における聖ラーマクリシュナと信者たち

ドーラ・ヤートラ祭の日に聖ラーマクリシュナと信仰のヨーガ

今日はドーラ・ヤートラ祭、主チャイタニヤの誕生日、ファルグン月十九日、満月。一八八五年三月一日、日曜日。聖ラーマクリシュナは室内の小寝台の上に坐って、三昧に入っておられる。信者たちは床に坐って、タクールの姿を凝視している。マヒマーチャラン、ラーム・ダッタ、マノモハン、ナヴァイ・チャイタニヤ、ナレンドラ、校長はじめ大勢が坐っている。

信者たちはじっと拝見していた。三昧が解けると、法悦にひたりきっておられる。マヒマーチャランに「お前さん(バーブ)、ハリ信仰のことばを――」とおっしゃった。

マヒマーは詠(よ)んだ――

愛もて神(ハリ)を呼べば　苦行の要なし
愛もてハリを拝さずば　如何なる苦行も空し

内にも外にもハリを見る者に　苦行の要なし
内にも外にもハリを見ぬ者は　如何なる苦行も空し

止めよ　止めよ　バラモンよ　息子よ　苦行を止めて
智慧の大海なる　シャンカラ（シヴァ神）のもとに行け

またヴィシュヌ神を信じるものは　信仰を持ち進め
その信仰の斧で　煩悩を　この世の足枷を断ち切れ

ナーラダ・パンチャラートラにある章句です。ナーラダが苦行していらっしゃったとき、天からの声が聞こえました――これがそれでございます。

ハリに呼びかけ、ハリを拝んでいたら、苦行など何の必要があろうか？　またハリを拝むことができないなら、苦行をしても何の足しになるか？　ハリが内にも外にもいますのに、なぜ苦行など必要なのか？　もしハリが内にも外にもいまさぬなら、苦行などしてもどうにもならないではないか？　故にバラモンよ、苦行を止めよ。息子よ、苦行の要がどこにある？　智慧の海、シャンカラ（シヴァ神）のもとに進み行け。ヴィシュヌ神を信じる者たちは、このハリ信仰を持って行け。この見事に熟（う）れた

信仰をつかめ。この信仰――この信仰の斧で煩悩をたち切るのだ、と」

〔神の分身(イーシュワラ・コーティ)――シュカデーヴァの三昧からの降下――ハヌマーンとプラフラーダ〕

聖ラーマクリシュナ「普通の人間(ジーヴァ・コーティ)と神の分身(イーシュワラ・コーティ)とがある。普通の人間の信仰は形式的な信仰だ。これこれの道具をそろえて礼拝すべし。一日に何回称名すべし。何回護摩を焚いて真言(マントラ)をとなえるべし。こういった形式的信仰の後に智慧が生まれ、その後で滅智する(三昧に入る)。その後、二度と戻ってこない。神の分身(イーシュワラ・コーティ)の場合は別だよ。――上がったり下がったりできる。〝これでもない(ネーティ)〟〝これでもない(ネーティ)〟と否定しながら屋根に上がったとき、屋根の材料も今まで上がってきた階段の材料も同じもので――煉瓦や石灰や煉瓦粉で――できていることをはっきり理解する。だから、屋根でしばらく坐っていることもできるし、階段を下りていくこともできるし、自由に上がり下がりできるんだ。

シュカデーヴァは三昧に入っていなすった。それも無分別三昧(ニルヴィカルパ・サマーディ)――ジャダ三昧(サマーディ)という最高の境地にね。パリークシット王(訳註1)にバーガヴァタを聞かせるために、神様がナーラダをお遣(や)りになった。ナーラダが来てみると、シュカデーヴァは無生物のように感覚もなくなって坐っていなすった。それで、ヴィーナの伴奏で、ハリの姿をたたえる四行聖句を詠じはじめた。最初の一行を口にすると、シュカデーヴァの身毛が逆立ってきた。次に涙が流れだした。自分の内奥(おく)ふかい胸のうちに神の霊姿を見なすったからだ。ジャダ三昧(サマーディ)の後でもまた、姿相(かたち)を見ることができたんだよ。シュカデーヴァは神の分身(イーシュワラ・コーティ)だからね。

ハヌマーンは、無形、有形、両方の神をさとった後で、ラーマの姿形（すがた）に堅い信仰を持ちつづけた――智慧と喜びの権化が、あのラーマの姿なんだよ。

プラフラーダは、〝それは我なり（ソーハム）〟の境地にいる時もあったし、自分はそれの召使いだという気分のときもあった。信仰を持たないで、いったい何を持ってこの世に住んでいればいいんだい？　だから、それは主人、自分は召使いという境地にいなくてはならないんだ。あなたは御主人、私は召使い！――ハリ（ヴィシュヌ神＝クリシュナ）のジュース（甘露（ラサ））を味わうためにね。甘露の水（ジュース）と、それを喜んで飲む人との関係だ。――ね、神様、あんたはジュース（原典註）、私はそれを飲んで楽しむ。

信者の私、明知の私、子供の私――こういう私は害がない。シャンカラ大師（アーチャーリヤ）は〝明知の私〟を残しておきなすった――人々を導いて下さるためにね。〝子供の私〟には執着がない。子供は三性（トリグナ）に縛られない。どの性（グナ）の支配もうけない。今、カンシャクを起こしたかと思えば、もうケロリとしている。今、積木の家を作ったかと思うと、すぐもう壊している。今日は遊び友だちと仲よく遊んでいるが、何日か会わないと、すっかり忘れてしまう。子供はサットヴァ、ラジャス、タマスのどの性質（グナ）にも支配さ

（訳註1）パリークシット王――アビマニユ（アルジュナとスバドラーの間に生まれた息子）とウッタラー（マッヤ国王ヴィラータの娘）との間に生まれたのがパリークシットで、王位に就いて善政を行った。（『マハーバーラタ』より）

（原典註）まさに精髄（ラサ）（甘露）を獲得して、この人は歓喜に満ちるようになるからである。もしも虚空において、この歓喜がなければ、実に、誰が息を吸い込み、誰が息を吐き出すであろうか。（タイッティリーヤ・ウパニシャッド２-７『ウパニシャッド――翻訳及び解説――湯田 豊／大東出版社』より）

れないんだ。

あなたは神様、私はあなたの信者――この信仰者の態度――この〝私〟が、〝信者の私〟だ。なぜ、〝信者の私〟を残しておくか？　これには理由(わけ)があるんだよ。〝私〟はどうしても消えて無くならないから、いっそこのナラズ者を、〝召使いの私〟か〝信者の私〟にしてしまえ、というわけだ。

千回思い直してみても、考えてみても、〝私〟は無くならないよ。〝私〟という形の瓶はね。ブラフマンは大海のようで――上下、左右、水ばっかり。瓶の内も外も水だ。水、また水だ。でもやっぱり瓶はある。それが〝信者の私〟の性格(すがた)だ。瓶があるうちは〝私〟もあるし、〝あんた〟もある。あんたは神様、私は信者。あんたは主人、私は召使い。この感じもつづく。千回考えてみても、これはどうしても消えないよ。瓶が無くなれば、そのときは又、話が別だ」

タクール、聖ラーマクリシュナのナレンドラに対するサンニヤーシンの教え

ナレンドラが入ってきて、ごあいさつをしてから坐った。聖ラーマクリシュナはナレンドラとお話しになる。話しながら床におりてきて、お坐りになった。床には敷物が敷いてある。そのころには、部屋は人でいっぱいになっていた。信者もいるし、外からの訪問者も来ていた。

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラに)――元気かい？　お前、よくギリシュ・ゴーシュのところに行くそうだね？」

ナレンドラ「はい、時々まいります」

新しく聖ラーマクリシュナのところへ、ここ数ヶ月、ギリシュはよく出入りしている。ギリシュの信念の強さは測り知れない程だ、とタクールは言っておられた。信念が強いと同じほど、神を求めることに熱心である。家ではいつもタクールのことを想っては陶酔していた。ナレンドラもよく彼の家に行くが、ハリパダ、デベンドラはじめ、大勢の信者たちもよく行く。ギリシュは彼らを相手にタクールの話ばかりしている。ギリシュは世俗の生活をするが、ナレンドラは世俗の生活はしないだろう、とタクールは見ていらっしゃる。――ナレンドラは〝女と金〟を捨てるだろう、と。タクールはナレンドラと話をなさっておられる――。

聖ラーマクリシュナ「お前、ギリシュ・ゴーシュのところへよく行くのかい？」

〈サンニヤーシンの資格――若い頃からの離欲――ギリシュはどの段階？――ラーヴァナやアスラたちのヨーガとボーガ〉

「でもね、ニンニクの容れ物はどんなによく洗っても、少しは匂いが残っているものだよ。若い者は清浄（きれい）な器だ！　女と金にさわっていないからね。長い間女と金にさわってきた人は、いわばニンニクの臭いがするようなものだ。

まあ、カラスについばまれたマンゴーのようなものさ。神前に供えることもできないし、自分で食べるのも嫌だ。新しい鍋と、凝乳用につかった鍋のちがいだよ。凝乳用の鍋には牛乳をいれておけない。すぐ酸っぱくなるからね。

そういう連中は、お前とは別なんだよ。ヨーガにも関心があるし、ボーガ(この世の快楽)も離せない。ラーヴァナみたいに天女もはべらせたいし、ラーマをもつかまえたい。

アスラ(阿修羅)たちはいろんな快楽にも耽(ふけ)るし、またナーラーヤナをもつかもうとする」

ナレンドラ「ギリシュ・ゴーシュは、以前(まえ)から交際していた人とは離れましたよ」

聖ラーマクリシュナ「年取ってから去勢された牡牛をね、わたしはボルドワンで見たことがある。一ぴきの去勢牛が牝牛のまわりをうろついているから、わたしはそばにいた牛追いに質問した。『この牛はどうしたんだい? これは去勢牛なんだろう!?』すると牛追いが言ったよ。『旦那さん、この牛はうんと年をとってから去勢しましたんでね、長年の習慣(くせ)が抜けねえんでがすよ』

ある場所に出家が何人か坐っていた。女の人が一人、そこを通りかかった。みんな神を瞑想していたが、一人だけ目をうすく開けて女を見ていた。その出家は、結婚して三人子供をつくった後で出家した人だった。

茶碗でニンニクをつぶせば、その茶碗からニンニクの匂いは消えないだろう? ババイ(バジルの一種)の木にマンゴーの実がなるかい? 神通力でも使えば、あるいはババイにマンゴーをならせることができるかもしれん。だが、そんな通力を皆が持てるかい?

世間の人が神を想う暇(ひま)があると思うかね? ある人がバーガヴァタを講義してくれる学者を頼みたいと思った。その人の友だちが言った――『非常にすぐれたバーガヴァタの学者がいるんだが、一つ難点がある。手広く農業をやっていてね――四ヶ所の耕地と八頭の牛を持っていて、その世話で年中

忙しいんだ』学者を必要としている人はこう答えた――『私は、そんな暇のないようなバーガヴァタ学者など要（い）らない。農地や牛を持った学者など探していない。私にバーガヴァタを聞かせてくれる学者が欲しいんだ』

ある王様は毎日、バーガヴァタの講義を聞いていた。学者は毎日、その日の講義が終わると、『王様、おわかりになりましたか？』ときいた。王様は毎日、こう答える――『先ず、あんたがわかって下さい！』学者は家に戻ってから、毎日考えた――王様はなぜ、『先ず、あんたがわかれ』などと言うんだろう？この学者はまじめな人で、瞑想や礼拝をつづけていたので、だんだん目覚めてきた。そして、ハリの蓮華の御足こそ肝心かなめであって、他のものは一切、虚仮だということを悟った。世俗の生活に嫌気がさして出家してしまった。人をやってたった一言、王様にことづけた――『王様、このたび、やっとわかりました』

だからと言って、わたしが世間の人を見下したりするだろうか？　いや、わたしはブラフマン智の目で見る。あの御方がすべてになっていなさる――一人、一人、みんなナーラーヤナご自身なんだ。女性器（ヨーニ）はすべて母の器だと見るとき、売春婦と貞女の区別もなくなる」

〔みんなカライ豆の顧客（おきゃく）――金と見かけの力に支配されている〕

「あーあ、みんなカライ豆（ヒラ豆）を欲しがるお客ばかりだ。みんな、女と金から離れる気がないんだ。人は女の姿に目がくらみ金の力に迷わされているが、いちど神の相（すがた）を見たら、創造神（ブラフマー）の地位さえつま

らんものに思える。(訳註、カライ豆の顧客――上等なもの(神)を求めようとせず、誰にでも手に入る安っぽいものを求める世俗の人のこと)

ある人がラーヴァナに聞いた。『あなたはいろんな姿に化けてシーターのところへ通っていくが、どうしてラーマの姿になって行かないのですか?』するとラーヴァナは答えた。『ラーマの姿を一度でもハートで見たならば、天女のランバーやティローッタマー(訳註2)の美しさも火葬場の灰のように感じるし、ブラフマーの地位さえ取るに足りなくなるのだから、まして他人の女房の関心を買う気なぞ、消し飛んでしまうからさ――』

みーんな、カライ豆の顧客だ。清浄な容器でなけりゃ、神への純粋な信仰はつくれない。――大方は一つの目標に集中できずに、いろんな方角に心が散るんだよ」

〔ネパールの少女――神の召使い――世間の人は奴隷〕

「(マノモハンに向かって)こんなことを言うと、お前は怒って出て行くかもしれんが、わたしはラカールにこう言っておいた――『お前が、神を想うあまりガンジス河に身を投げて死んだ、という話なら聞いてもいいが、誰かに雇われたの、勤め人になったのなんて話は、わたしゃ絶対に聞きたくない』とね。(訳註――ラカールの妻ヴィシュヴェーシュワリーは在家信者マノモハンの妹)

いつか、ネパールの少女が一人ここへ来た。イスラジ(ヴァイオリンに似た弦楽器)にうまく合わせて歌をうたったよ。ハリ称名の歌をね。誰かが、『あんた、結婚しているのかね?』と聞くと、その娘は

こう言ったよ――『今さら、誰の召使いになるんですか？　私は、一なる至聖（かみ）の召使いです』

女と金のなかに住んでいて、どうにかなると思うかい？　無執着でいるなんてことは、とてつもなく難しいよ。女房の奴隷になり、金の奴隷になり、おまけに雇い主の奴隷になるんだよ。

一人のファキール（イスラム教の托鉢僧）がデリーの王様だった。大勢の人がその隠者を訪ねていく。彼はどうにかしてお客をもてなしたいものだと思った。だが一方、金が一文もなくてどうして客をもてなすことができよう？　それでアクバルのところへ頼みに行くことにした。サードゥやファキールたちは自由に王宮の門を通れたからね。そのときアクバル皇帝は礼拝室で祈祷をしているところだったが、ファキールはそこに入って坐って待っていた。聞いていると、アクバル皇帝は祈りの最後にこう言った。――『おお、アッラーよ、財宝を与え給え、富を与え給え、などなど……』これを聞いたファキールは、立ち上がって礼拝室から出て行こうとした。アクバル皇帝は、『坐っていろ』と合図をした。礼拝がすっかり終わると皇帝は聞いた。『あなたは来て坐っただけで、また出て行こうとされたね？』ファキールは答えた。――『大王さまに聞いていただく必要はないので私は帰ります』皇帝がしつこく理由（わけ）をたずねるので、ファキールは言った。――私のところへ大勢の人が訪ねて来ますので、もてなすた

（訳註２）ランバー、ティローッタマー――共に美しい女性の姿をした天界の水の精（アプサラス）。またランバーに関して言えば、ラーヴァナがその美しさのゆえに、甥の妻であったが力ずくで自分のものとした。

めのお金をいくらか頂戴しようと思って来ましたのです』アクバルは言う。『では、なぜ帰ろうとされたのか?』ファキールは言った。『あなたも、金や富がほしい乞食だということがわかりましたから――乞食にものをねだっても、どうにもならんでしょう? 欲しかったら、アッラーに頼めばいいと思ったのです』と」

〔以前の話――フリダイ・ムコパッダエの口の悪さ――タクールのサットヴァ性状態〕

ナレンドラ「ギリシュ・ゴーシュは最近、タクールのおっしゃるようなことばかり考えておりますよ」

聖ラーマクリシュナ「そりゃ、たいそういいことだね。でも、どうしてあんなに口が悪くて、ずけずけものを言うのかねえ? ああいうのは、どうもわたしの気分に合わない。雷が落ちると、部屋にある重たいものはそう揺れないが、軽いものはガタガタ音をたてる。わたしの境地は、ああいうことに我慢ができない。サットヴァ性の境地では、騒がしいのは禁物だ。だから、フリダイは出て行ったんだよ。――大実母(マー)がここに置いておかなかったんだ。終わりのころは、ほんとにうるさかったからね。わたしを口汚く罵(ののし)ったりして、大声をあげたりしてさ」

〔ナレンドラは神の化身(アヴァターラ)を信じているか?――ナレンドラは出家僧(サンニャーシン)に属す――父親の死〕

「ギリシュ・ゴーシュが言っていること、お前も賛成しているのかい?」

ナレンドラ「私は何も言っておりません。あのかたが、あなたはアヴァターラだと信じておられる

のです。私はそれについて、何とも申しませんでした」

聖ラーマクリシュナ「でも、あの人はほんとにそう信じきっているね！　わかるだろう！」

信者たちはじっと見ていた。タクールは下の敷物の上に坐っていらっしゃる。すぐ横に校長、正面にナレンドラ、周囲に信者たち――。

タクールは少し黙って、ナレンドラをやさしく見つめていらっしゃる。

間もなくナレンドラにおっしゃった――「息子（ババ）よ、女と金を捨てなけりゃいけないよ」言っているうちに、奥から強い霊的恍惚感（バヴァ）が湧き上がってこられたご様子だ。あの慈悲にみちたやさしい目つきでナレンドラを見ながら、彼に愛情をこめて歌をうたい出された――

語るも恐ろし　語らぬも恐ろし
宝とも思う君を　われ失いたくなし
わが心は君のもの　君にすべてを与えむ
危なくも苦しきこの世の海を
渡して彼の岸に到る真言（マントラ）を――

聖ラーマクリシュナは、ナレンドラがご自分のところから離れていくのではないかと恐れておられるようにみえた。

ナレンドラは目に涙をうかべて、タクールを見つめている。(221ページ 訳註5)

新しい信者が一人、タクールに会いに来ていた。その人もそばに坐って、すべて聞いたり見たりしていた。そしてタクールに質問した。

信者「先生、女と金を捨てなければならないのでしたら、家庭を持った者はどうしたらよろしいのですか?」

聖ラーマクリシュナ「お前はいいんだよ! わたしらは、お前さんたちとは関係ない話をしているんだよ」

〔在家信者に対する請け合い――恐れるな〕

マヒマーチャランは黙りこんで坐ったまま、口をきかない。

聖ラーマクリシュナ「(マヒマーに)――前進しろ! もっと先に進めば白檀の木がある。もっと先に行けば銀の山がある。もっと先に行けば金の山、もっと先には宝玉の山が手に入る。前進しろ!」

マヒマー「ですが、後ろに引っ張られて――前に出られないのです!」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハハハハ、どうして? 手綱を切れ、あの御方の御名の力で手綱を切ってしまえ! 〝カーリーの名にて死の絆(きずな)を切り〟だよ」＊＊＊(訳註3)

ナレンドラは父の死後、大そう生活に苦労している。いろいろ面倒なことが次から次へと彼の肩にのしかかって来るのだ。タクールは、時どきナレンドラを見ていらっしゃる。やがて彼におっしゃった。

「お前、名医になったかい？

〝百人殺すは藪医者で

千人殺すは名医なり〟（サンスクリット）」（一同大笑）

ナレンドラがまだ若いのに、多くのことを見聞きして、人生の悲喜となじみになった、ということをタクールはおっしゃったのだろうか？

ナレンドラはかすかに笑って、そのまま黙っていた。

ドーラ・ヤートラ――聖ラーマクリシュナ、ラーダーカーンタとカーリーの像、そして信者たちに色粉（アビール）を振りまく

ナヴァイ・チャイタニヤの歌がはじまった。信者たちは皆、床に坐っている。タクールは小寝台に坐っておられたが、突然立ち上がられた。そして部屋の外に出られた。信者たちはそのまま坐っていて、歌をきいていた。

（訳註３）ベンガル語原典「コタムリト全五巻」には、タクールの言葉の後に＊＊＊と印字された箇所が５ヶ所ある。これらは、一般の人には公言してはならないとタクールから言われたか、もしくはマヘンドラ・グプタがそう判断した秘密の内容と思われる。また、マヘンドラ・グプタへの個人的な教えであるため公開しなかった内容のようである。このことは、マヘンドラ・グプタの直筆の日記を読むことが許された熱心な「コタムリト」の研究者が「コタムリト」と「日記」を照らし合わせて読んで導いた結論である。

校長はタクールについて部屋の外に出た。タクールは煉瓦敷きの中庭を通ってカーリー堂にいらっしゃる。先ず、ラーダーカーンタ堂のなかにお入りになった。床にぬかずいて礼拝をなさった。タクールが礼拝なさるのを見て、校長も同じように礼拝した。タクールの前にある皿には色粉(アビール)(ヒンドゥー教徒が春の祭でまきちらす色粉)が入っていた。今日はドーラ・ヤートラ祭ということを、タクール、聖ラーマクリシュナは忘れてはいらっしゃらない。皿の色粉を神像に供えられた。そして又、礼拝なさった。

今度はカーリー堂にいらっしゃる。先ず、七段の階段を上がってテラスに立ちどまり、大実母(マー)をじっと眺めてからお堂の中にお入りになった。マーに色粉(アビール)を捧げて礼拝された。終わるとカーリー堂から出て来られ、正面のテラスに立ちどまって校長におっしゃる——「なぜバブラームを連れてこなかった?」

タクールは再び煉瓦敷きの中庭を通って歩いてゆかれる。校長と色粉(アビール)の皿を持った人が一人、つき従っている。部屋に入ると、全部の聖画に粉を供えられた。——一、二の絵、ご自分のお写真とイエス・キリストの絵を除いて——。やがてベランダにいらっしゃる。ナレンドラは部屋から出てベランダに行って坐っていた。そして、信者の誰彼と話をしている。タクールはナレンドラの体に色粉(アビール)をふりかけておやりになった。部屋から出てきた人たちも、校長といっしょに来た人も、色粉(アビール)をふりかけていただいた。

部屋にお入りになった。部屋にいる信者たちの体に粉をふりかけて下さった。

午後になった。信者たちは境内のあちこちを散歩した。タクールは校長とヒソヒソと話をしておら

れる。そばにはほかに誰もいない。青年信者の話だった。

「うん、皆、よく瞑想できるって言ってるがね、あのパルトゥだけはうまく出来ないそうだが、どうしてだろう？

ナレンドラをお前、どう思う？　素直な子だよ。だが今は、家のことで大そう苦労があるから、静かにしているがね――なに、もうすぐ終わるさ」

タクールは時々、ベランダにいらっしゃる。ナレンドラがあるヴェーダーンティストと議論しているのだ。

信者たちは次第に、また部屋に集まってきた。タクールはマヒマーチャランに讃詞（スタヴ）を詠（よ）むようにとおっしゃった。彼はマハー・ニルヴァーナ・タントラの第三章から、次の讃詞を唱えた――

心の蓮華の中心　絶対にしてすべてを超越し
ハリ　ハラ　ブラフマーによって崇拝され
ヨーギーが最深の瞑想によりて到り得る
誕生と死と苦をことごとく滅し去る
真理の智　存在の本質　すべての世の種子なる
至聖ブラフマン意識を礼拝し奉る

〔在家に対する無恐怖の励まし〕

さらに、一、二の章句を唱えた後、マヒマーチャランはシャンカラ大師(アーチャーリヤ)の作った宗教讃詞(スタヴ)を詠(えい)じた。世間を、深い井戸と荒野に喩(たと)えた詩である。マヒマーチャランは在家の信者である。

おお　月の冠をいただき　三叉の鉾(やり)を手にもち
すべての欲情煩悩を滅尽して
生きとし生けるものの苦怖を壊滅する
不動なる神　大実母(マー)カーリーの配偶(おっと)よ
この世の深き悲苦の道なき森より　われらを救い給え

おお　パールヴァティーの最愛の夫(つま)ルドラよ
月の冠をいただき　弓を手にせる
全存在の支配者　聖なる愛の主(あるじ)
いと高き静かなる雪山にも似た　喜びの神(デーヴァ)よ
この世の深き悲苦の道なき森より　われらを救い給え

聖ラーマクリシュナ「(マヒマーに)――世間は深い井戸、この世は道なき森だとか、どうしてそん

なふうに言うのかな？　そりゃ、ほんの初めのうちはそう言えるかも知れんがね。あの御方をつかめば、恐いことなんか何もない。そうなれば――

この世は楽しい遊び小屋
私は食べたり飲んだりしながら
愉快に遊んで暮らして行くよ
それに較べりゃジャナカ王は
たぐい稀なる賢い御方
不足のものとて何一つなく
あっちもこっちも両方つかみ
コップにあふれるミルクを飲んだ！

何が怖（こわ）い？　あの御方をつかんでいろ。イバラの森だって平気さ。靴を履いて歩きゃいいだろ？　何が心配だ？　かくれんぼでも鬼ババに触れば、もう〝泥棒〟にならなくていいんだ。

ジャナカ王は二刀流だった。智慧（ジュニャーナ）の剣と行為（カルマ）の剣と――。達人には恐いものなしだ」

こんなふうにして霊的な話はつづく。タクールは小寝台に坐っておられる。寝台のすぐわきに校長は坐っていた。

タクール「(校長に)――あれ(マヒマーチャラン)がさっき言ったことに、まだ気が引かれているんだよ!」

タクールは、マヒマーチャランが詠唱したブラフマン智に関する章句のことを言っておられるのだ。ナヴァイ・チャイタニヤと他の信者たちが歌いはじめた。こんどはタクールもいっしょにお歌いになり、法悦に酔ってサンキールタンのなかで踊られた。

キールタンが終わると、タクールはこうおっしゃる――「これだけがほんとの用事、あとはみんな虚仮(うそ)のこと。愛と信仰――これが真実、あとは皆まぼろし――」

ドーラ・ヤートラの日に聖ラーマクリシュナと秘密の話

夕方になった。タクールは五聖樹(パンチャバティ)の杜に行かれた。校長にビィノドのことをいろいろとをお聞きになる。ビィノドは校長の生徒である。ビィノドは神を瞑想しているうちに、時々恍惚状態になるのだった。それでタクール、聖ラーマクリシュナは、彼を愛していらっしゃるのである。

タクールは校長と話をしながら部屋に戻られた。バクル樹台(タラ)のあたりにさしかかったときおっしゃった――「なあ、わたしのことをアヴァターラだと言う人たちがあるけど、お前はどう思う?」

しゃべりながら部屋に着いてしまった。サンダルをぬいで小寝台にお坐りになった。寝台の東わきにマットが一つ置いてある。校長はその上に坐って話していた。タクールはさきほどの質問をまたなさる。他の信者たちはすこし離れた場所に坐っているので、二人の話は聞きとれない。

聖ラーマクリシュナ「お前、どう思う？」

校長「はい。私もそう思います。チャイタニヤ様（デーヴァ）がそうであったように――」

聖ラーマクリシュナ「全部か、それとも半分か、それとも半分以下か――どの程度のかねえ？」

校長「はあ、それは、私にはわかりかねますが――。しかし、たしかにあの御方の力（シャクティ）が受肉しておられるのです。あの御方がなかにいらっしゃるのです」

聖ラーマクリシュナ「うん。チャイタニヤ様（デーヴァ）はシャクティを認めなすった」

タクールはしばらく黙っておられた。そのあとで言われた――「でも、六本腕かな？」

校長は考えた――チャイタニヤ様（デーヴァ）は六本腕〔訳註4〕になられた――信者たちが見たのである。タクールは、どういう意味でこのことをおっしゃったのだろうか？

〔以前の話――タクールの狂気状態――大実母（マー）の前で号泣――議論や推論を嫌う〕

信者たちは少し遠巻きに坐っている。ナレンドラは議論をしている。ラーム・ダッタは病気が治ったばかりなのに、彼もナレンドラとものすごい剣幕で議論している。タクールはそちらを眺めておら

（訳註4）六本腕――ヴィシュヌ神の一つの姿として六本腕の姿があるが、チャイタニヤも六本腕（二本の腕で縦笛を吹き、弓を持つ手、矢を持つ手、出家としての水入れ（カマンダル）を持つ手、杖を持つ手）の姿を現し、信者たちはその姿を見てチャイタニヤをヴィシュヌの化身とはっきりと認識した。

れる。

聖ラーマクリシュナ「(校長に)わたしゃ、あんな議論は好かんね。(ラームに向かって)やめろ!病み上がりのクセに! ――まあいい、もっと静かにやれ。(校長に)わたしゃ、こんなの好かんね。わたしはよく泣いて頼んだものさ――『大実母(マー)、この人はコレだ、コレだ、と言うし、あの人はまた違うことを言う。どっちがほんとか、あんたがわたしに教えておくれ!』」

（訳註５）この日、ナレンドラは自分の使命を認識し、出家を決意していた。この日のタクールとナレンドラの会話は、それを感じさせる内容となっている。以下、『インドの光』より抜粋する――

ナレンドラは相変わらず空腹をかかえて一日中仕事さがしと金策に歩きまわっていた。ある日の夕方、ずぶぬれになって家に帰る途中、疲労のあまり足も思うように上がらなくなり、とある家の軒下に倒れこんでしまった。

「意識を失ってしまったのかどうか、私にはわからない。さまざまな色彩の思想や風景が次から次へと心に浮かんでは消えてゆく。それらを追い払う気力もなく、特に一つのものに集中する力もない。とつぜん、何か大きな力で、私の魂を覆っていた幾枚もの幕がはぎとられたように感じ――長年私の知性を悩まし心を乱していた数々の疑問が――たとえば、神の無限の愛と厳正な処罰との関係といったような――疑問の塊が、あとかたもなく溶けていった！　私は狂喜した。

立ち上がって歩き出したとき、体の疲労は完全にいやされ、心は無際限の勇気と平和に満たされていた。もう夜が明けかかっていた。

翌日、私は出家する決心をした。私は金をもうけたり、家族に仕えたり、世間なみの喜びを求めるために生まれてきたのではない。私は祖父のように出家するのだ、とはっきり決め、家を出る日を考えていた」

ところがその日、ラーマクリシュナが急にカルカッタに出て来た。その知らせをきいたナレンドラは、ちょうどよかった、世間から永久に姿を消す前に、一度あのかたに会おう、と思った。

ナレンドラの顔を見るや否や、ラーマクリシュナは異様なしつこさで彼をさそう――「今日は、わたしといっしょに南神村（ドッキネーショル）に行こう。どうしても連れて行くよ」

馬車の中で、二人はあまり口をきかなかった。寺に着き、部屋に入ると、一ときラーマクリシュナは恍惚としていたが、やにわにナレンドラに近づき、彼の手をしっかり握ったまま、涙を流しながら歌った――。

言えばいいのか　言わぬが花か

どうすりゃお前を　ひきとめられる
　どうすりゃお前は　ここにいる

ナレンドラの胸から涙が溢れ出てきた。師弟は手をとりあって泣く。「このかたは、何もかもわかっているのだ……」

同席していた人びとは、どうしたことかと怪しんだ。やがて二人が落ち着くと、口々にきく――「どうなさいましたか、何かあったのですか?」ラーマクリシュナはにっこり笑って応じた。「いや、ナレンドラとわたしと二人だけのことさ。皆には関係ない」

夜になって皆が帰る。二人だけになった。

「お前は大実母(マー)の仕事をするためにこの世に来た人だ。世間で暮らせるはずがない。そんなことは、とうに知っていたよ。けれど、お願いだから、わたしがこの世にいる間は、家族といっしょにいておくれ。どうか、わたしのために、そうしておくれ」――ラーマクリシュナはそう言いながら、子供のように泣きじゃくった。